

## 震災後の子どもたち(19)

# 巣立つ子からの贈り物

森末 哲朗

この原稿を書いているのは、一九九七年の十一月。あの大地震から数えて、二年と十か月になる。「もう、二年十か月か」とも思えるし、「まだ、そんなものか」とも思えるが、とにかく三年近くの時間が流れたことは確かだ。

振り返ってみると、激震のために屋根に穴があき、全壊してしまったどんぐりクラブの建物を再建するために、丸一年の時間を必要とした。その

一年間は、近くにある都賀川公園の「テント村」の中で、被災者のおっちゃんやおばちゃんたちのテントの並ぶ中で、「テント学童クラブ」の生活を余儀なくされたものだ。

かろうじて「生き残った」家具たちは、友人宅の庭で青いビニールシートにぐるぐる巻きにされ、「春」が来るまで冬眠することとなった。狭いテントには、生活する上で最低限必要なものだ



けを運び、できる限り身軽な状態でいることが、あの当時の暮らしの知恵だった。

### 非日常の日常化

長い長い一年の間、再建委員の人たちは、安藤隆子さんや大西宏さんを中心に東奔西走し、ようやく元の場所に念願の新居が建ち上がった。これには、家主の森分一寿さんの理解と厚意が、何よりも大きな掩護射撃になったことは言うまでもない。

ところがこのぼくはといえば、一年の間にテント生活という「非日常」が日常化してしまい、新しい建物にはすぐには馴染むことができないでいた。バイクに乗って自宅からどんぐりクラブに向かった筈なのに、着いたらテント村だったという笑えない話が何度か繰り返された。こんな間抜けな奴は自分だけかと思っていたら、「おっちゃん、今日なあ、知らんまにテントに行っつても



◀ 緑色のテントの中で

た」と、学校から帰ってきた子どもが笑いながら話してくれたことがある。

「なんや、お前もか」と、妙に嬉しくなってしまう。

建物というハード面での「復興」はできても、頭や手足は昨日までのことをよく憶えていて、まともな建物で暮らすことの方が「非日常的」だったのだ。

### 春夏秋冬をくぐって

冬眠中の家具たちが、総二階建ての新居に戻り、子どももほくも道を間違えなくなるのに何週間かの時間が流れた。

「家の中にトイレがある！台所もある！」

当たり前のことがやけに嬉しかった。そうして、トイレや台所があることが、当たり前のこととして特別な感激を伴わなくなるのに、何か月の時間が流れた。

日常というものが、音もなく流れるようになるには、春夏秋冬を最低一度はくぐり抜け、それまでの一年との違いを噛みしめることが必要なのだろう。

テントの中では、大風が吹けばそれはそのままザワザワしたおぞましさを運んでくる。

雨が降れば、テントシートを叩く雨音が部屋中に響く。

「窓を閉めて、ドアも閉めたら、ここは静かやねえ」

台風の季節には、そんなことがしみじみ感じられたものだ。

新居で四季を迎え、流石に二年目に入ると、ことあるごとに「テントでは、こうだったねえ」と比較することが少なくなっていた。

### 巣立ってゆく恵介

新居での二年目も半分以上が過ぎた九月のある

日、六年生の恵介がだしぬけにこう言った。

「おっちゃん、あの、ワリバシで作った写真の額、もう作らへんの？」

ソーメンの木箱を電動糸ノコで裁断し、それを台にしてワリバシをポンドで貼りつけ、それに色ニスで彩色した手造りの写真の額のことだ。地震がくるまでは、毎月の誕生会のたびに、気に入った写真を入れて子どもたちにプレゼントしていたものである。

恵介は、「楽しみにしとってんけどな」と言う。考えてみれば、地震に襲われた一九九五年の一月十七日当時、彼はまだ小学三年生だったのだ。幼さの抜け切らなかつたあの頃と比べれば、ガッシリとした体つきに変わった「少年」の恵介が目の前にいた。

……もう、六年生なのだ。彼はあと半年もすれば小学校を卒業し、同時にどんぐりからも巣立っていく。残すところあと半年なのだ。

ぼくには、彼が残された時間の中で、どんぐりというもののイメージを結晶させようとしているように映った。そんな想いを持った子どもの前では、怠惰でいる訳にはいかない。

「お前が卒業するまでに、全員の額、作つたる」そう応えてしまった。

みこしをあげたら？

十月のある日、また、恵介が言った。

「おっちゃん、もちつき、やらへんの？」

ぼくの予感ほ、どうやら当たっていたようだ。あの大地震以降、どんぐりは大きく変わったのだが、恵介にとってはどんぐりがどんぐりである限り、これとこれとこれは「復活させろ」というイメージがあるようなのだ。

それを「結晶」と言い換えてもいいのかもしれない。

もちつきもそのうちの一つなのだたと合点が

いった。

子どもという生き物は、過ぎ去ってしまったことはたちまち忘れさってしまうという特技をもっている。そのくせ、印象の濃かったものは、いつまでも忘れずにいるという生き物でもある。地震の前までやっていたことなど「もう、忘れた」と言われても仕方のないことなのだ。それを恵介は「もちつき、やらへんの？」と迫ってきた。やっていた最中は、

「果たしていましていることが、子どもの心と身体に刻まれるのだろうか？」と、自信がなかったのだが、こうして迫られることで確信を得た気がして、嬉しくなった。

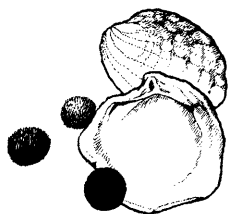
年に一回、親子総出で百キロを超えるもちを三年間（地震まで）つきあげてきた。それが、恒例行事となっていた。冬の風物詩として、子どもの脳裏に刻まれるといいなと思ったことを憶えている。

また、月に一回、どんぐりの小さな庭で、つきたてのもちをそのままおやつとして食べようということで、月例行事としてのもちつきも十年間続けてきた。

超消費社会ともいべき現代の暮らしの中で、子どもたちが安易に消費者になってしまうことへの抵抗という意味が、おやつとしてもちをつくことの中にはあった。

おとながついたもちを、子どもに食べさせてやるのではなく、子ども自らがキネを持ち、非力でも全員で力を合わせれば、十分に食べるに値するもちがつけるといふ体験をさせたいという意味もあった。

もちに手水をつけたり、ひっくり返したり、手返しの役を買ってでる子も現れ、技術



の習得という意味も、年に一度ではなく「月に一度」ということの中にはあった。

ピカピカの一年生として入所してきた恵介は、一年生の時には十回ついた。二年生になって、二十回ついた。三年生の時には、三十回ついた。学年かける十という回数を、ひとつの目安として、小さい子は小さいなりに、大きい子は大きいなりに、全身の力をふりしぼってついたものだ。

地震からこっち、つまり恵介が四年生と五年生の時の丸二年間、月例もちつき大会は復活できないでいた。

テント生活中は、物理的に無理だったところもあるのだが、新居に戻ってからはやろうと思えばやれた。ところが、何もない中で暮らしたテント生活の中で、どうやらぼくの身体の奥の方に「その日暮らし」ともいえるべき怠惰が根を下ろしてしまつたようだ。ドサクサの最中は、実際、その日その日をどう暮らすかということしか考えら

れなかつたこともあるにはあったのだが……。

新しい建物もでき、「復興」なつたのだから「サア!」とばかりに走り出せば格好が良い。しかし事實はその逆で、急にどこから湧いてくるのかと思う程の怠惰と億劫さに支配されてしまつた。かろうじてその日その日のことはこなせても、まだ芯のところが起きていない、そういう感じを引きずっていた。

「事情はわからんこともないけど、オレ、もうじき卒業やねんで。ええかげんに、みこしあげたら?」

恵介はそんなことは言わなかつたけれど、ワリバシの額といい、もちつきといい、実に優しく、実にいいタイミングで、ぼくがみこしをあげやすいように手伝ってくれた気がした。

### 「震後」の途上

十一月一日、二年十か月ぶりに「月例もちつき

大会」が復活した。

物置きの間で眠っていたお釜やセイロやキネたちが眼を覚ました。

庭で雨ざらしになっていた石ウスが、タワシできれいに磨かれた。

二十人余りの子どもたちがそのまわりをとり囲む。手返し役を買って来た恵介は腕まくりをしている。一年生から順にもちつきを始め、順番待ちの子どもたちが「ひとつ、ふたつ」と、応援歌のように数を数える。

重いキネが振りおろされ、次にまたおりてくる間に、恵介の手は機敏に手水をつけていく。彼の手を見ていると、「おっちゃん、どんぐりは、こうでないとかんで」と語りかけられているような気がした。

学童クラブという場所には、教科書もマニユアルもない。何をして、何をしなくても、一日一日は過ぎ去っていく。知らないうちにアナーキー

な子どもたちの吹き溜りになる可能性だって無いとは言えない。地震によって一度はゼロ地点に立たされたどんぐりが、それまでの何かを捨て、これからの何かを創っていくその途上を、子どもたちもぼくもいま歩いているのだ。あの厳しかった「震後」の時間を一緒に歩いてきたという意味では、恵介とぼくとは「戦友」なのかもしれない。その戦友に、最後の贈り物と考えたぼくは、どうやら自分が勘違いをしていたことに気づかされた。

「どんぐりは、こうでないとかんで」という彼からのメッセージを、ぼくの方が贈られていたのだ。

あと半年足らずでここを巣立っていく恵介に、どんぐりの「結晶」とはどんなものなのか、大慌てで教えてもらうことにしよう。

(六甲学童保育所どんぐりクラブ指導員)